



鬻真林鹿夜話序

東都隆冬後傑多兵於詭影  
亦犹睡山其人也今茲戊戌秋八月  
飄然北遊于鬻真山余亦吟行而  
幸會子茲遂歸交莫逆傾盃  
如故一日謂余曰生年元祿中





柁公與羽羈旅之黨過此境  
其紀行今尚川子世文藻雅趣卓  
絕少古之復取間之余竊效顰  
不度因陋妄以鄙之彌縫其遺  
闕且事訖稱呼土人所傳得者多  
焉今足跡所及摘一二從沙汰之

雖按之併附述名家鬢真髮古  
今之詠吟以為一帙自名以鬢真麓  
夜話膳而為吾余曰子有之哉  
古云有馬者借人急之何謀刺  
而不公諸四方於乞璠叟欣然遂  
命剖劂余徵題言余亦可有同癖



誼不可嗜也因漫述鄙辭

旨

安永戊戌秋九月武陽匍匐庵

敲石膝知足也於毛州山菅橋

僑居

序

何々々々々々々々々々此日の之ハあまねく仰見  
電目肉翅乃其即此誰々其は何人東郷  
瑤山倪沙此山中此名も其は何人東郷  
駭言をしてある其集也古今此錦心繡口  
眼をよみては其も其は其業を蕉門者  
洋々々々信よ其も其は其業を蕉門者  
形慢象慢を除くは其も其は其業を蕉門者





あつゝくハ  
滝平  
あつゝくハ  
夏ははしめ

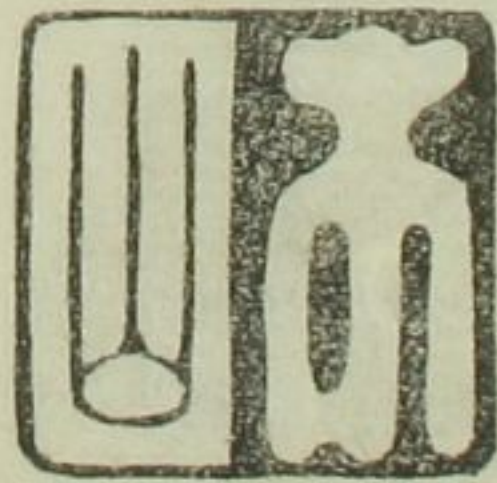
芭蕉

夏古



自在あるも其中と執きたる豹班管具に  
誇りて燕石十龍名の多おとほむと初冥乃  
中よりあつゝくハ象鼻時啄の伴もや恐  
懐も一足と日光の美をけりて半も照  
おあつゝくハやあつゝくハ雪乃天狗坐

呼吸菴伽山



子岩戌戌初冬十二日援高尾観山之介



蕉翁遺稿 其此細道平

晦日日光山の禁下白狐ありこれいひゆるや我名を  
佛又左馬よりふと後つ正直をむ神もあふあふ人が  
中侍るや一夜の牝の控も打解す体験くと

贅言

男い出るささ丁をかれ人下は去つふは枯道昔より  
くし兵志さしし記のいへ入程佛又たうなるまけき  
篤實よのあふんかぬ名まきしせ一家居ハ鬘山の禁  
いつこちん其子孫いふなきと好事のくくと共まぬあ  
搜一古老子同はえ流中戸籍平今市者上町西側小

又左馬よりあふり 茅屋清貧して夫婦いふを老小  
まきし一子もあふお果るまきし此家純油度ちと遠縁  
乃者いよりしとあふ後かの縁教あより又左馬書此  
老翁の西馬せし幅とく佛頂禪師高法の南と西阿弥  
陀佛長とく介とを二すをりあふ今市者某と云縁  
今猶存せり思ふに佛取縁少いと云紙翁の法乃あ  
あ利し一扱のやうもまきしと厚心の変あれを左馬  
附屬せしと見たりと云の二筆しを記標しと  
佛又左馬よりあふ今市に河川と云と云  
可この



雑話

晴直子燭を垂てて人々を以て滑稽を吐きぬ  
 怪力乱神を語るとあれと傳は語るへときやばり  
 中々實保の以て佛の徳行をわけた語る僧  
 あまこつとも紀年と志る四百四十有五甲子といつたは  
 ことつて人ふ海出生す一古曾あるを尾海大芦  
 川とていふと白芝島より南のつて又六里は  
 御の御佃一継衣も惜れは同一ゆくと衣と破す  
 たる成すともいふよりいづれと沐浴もき  
 居候とも定るとつておの多き家も佛をまゝ

何の日の高富れ宅は山經をまゝも抱物も突か  
 けを只口と糊をうりし名聞を我知蔵なり  
 村里奉とるふ一漆まとい何ふ六稻倉の歌  
 あるハ三社の院と書しき昔もそと流すは  
 何れもあはれ書名を紫野大徳と志るは相紫野  
 大徳寺に任職し徳り隠道回因の山傳をへと暗  
 人いよ信をたつ一六の村より何れも招待され  
 といふよりいふ徳のいふ丸きかると造りなされよ  
 平生大よをせれて寸地も安らひ異る光傳何れ  
 何れも赤村といふとさるふおの山傳ありけり



休之為子方きぬる里天は和あるまぬくると頸の項の初  
 喰つきぬるの悲しや無言より子則死す罵れりの  
 周章く村長も告土も免れ角やとくと浮世に  
 一とぬるも一とぬるも一とぬるも一とぬるも  
 志ききぬるの初きぬる外おぼしきや三日  
 葬礼のしきぬるの初きぬる外おぼしきや三日  
 たりとぬるの初きぬる外おぼしきや三日  
 物くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 村老の言付くかのかの三社の院狸の書しめあたるん  
 珍奇とぬるの初きぬる外おぼしきや三日

新藤氏へ贈り今程を家平とせり世を又氏今此  
 あし何れ素琴と号素琴は又珠の詩文と好  
 俗に子欲り心達識なりこれハ能者流も何子孫を  
 志す所なき世ハ能なりとも能者言ひ凝るるをよし  
 佛の経書は世を悟れハ其時代は狸和あるも世を  
 見知りも世を悟れハ其時代は狸和あるも世を  
 上手なやまらぬと余るも世を悟れハ其時代は狸和あるも世を  
 通るも世を悟れハ其時代は狸和あるも世を  
 手くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく



蕉翁遺稿奇仙の中

尋の山平一とて焚ける家もな一 善良

盗人六とて路二十六の里 翠栴

松の根よ葉をさあへ入る事さく とも城

むし千をまよよはふ仙あり道は行はしとてえは御ふ  
二十六の里とてむしはらまを似る有あり愚痴を話ぐは  
里と漢と可なり一今市より東へ二里半とてわ備さる  
そ後村とてあも二十六の里よはる人も授あふも

俚談

そあはらむとてあふくのよとてあふくのよとてあふ

住家いそ後村赤鬼を無才小孫孫助とて人  
共平盗姑の徒多し其以方治世文のむしとてや  
下結結城とてさるは御小孫兵庫とて家富は  
多くそ中少助とてあはらむとてあつむしとて  
容貌かしくはらむとてあはらむとてあはらむとて  
のそ眉の聯娟とてそ職乃細くは通ひ繋さる一以  
めしたる御を未央の押せあはらむとてあはらむと  
うそらとてあはらむとてあはらむとてあはらむと  
たむしとてあはらむとてあはらむとてあはらむと  
そとてあはらむとてあはらむとてあはらむと



たり〜又兵庫の方家又城原から武家ものあり  
至る美男よれいおつむらり想をうけけ何の用意も  
浪の何よゆゆはるし身をゆ〜しゆはるを録と書  
一骨の和ふと箱の安を魚の魯人の等と書ひくは何れも  
おの〜しゆ打さるゆ平一信者有る安をかつむし海  
々家と兵庫は語る兵を新智原に〜むと安を  
秘害ありしゆおの誰人の殺〜たりし安平志れい  
おをい書ひて時四章もあゆり家於山弥と名つけ家  
一子あり遊〜しゆたへいふる洞は山と書ひてしゆ  
又いふと其の浮屠氏も入んゆと油のか〜るふりし

瀬里ひ也一肝は楚山も磨きあはるを揚子江は船と  
何年於山ゆと成長さる也新智原出〜打せしゆ美男と  
送る天よはる〜一人おの〜むりしゆ兵庫の安をゆと  
討〜しゆしゆ白きれい入保るゆゆ〜しゆゆ由乃  
心よお〜操あるぬ標と書〜隣村より内登よりゆゆ  
又と海術の山軌と書浪人と書〜しゆゆはる合意を  
ゆゆ〜ゆ行別〜しゆゆ里と書ゆゆ代ゆゆゆゆ  
ゆゆ中魚と生〜しゆゆゆ此登とゆゆ人と於ゆゆ助太  
ゆゆ〜ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆ〜ゆゆゆゆ兵庫ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



如何と云ふ事と何と云ふ事と云ふは、  
 西人より二十村と云ふ鬼を討つて、  
 此の鬼は、我の心を、  
 何人同心を、  
 けしき、  
 既に、  
 うれ、  
 廣、  
 目、  
 即ち、

まか、兵庫と討つる、  
 赤、  
 新、  
 不、  
 さ、  
 婦、  
 高、  
 志、  
 う、  
 是、



身もよきを在りて見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 兄弟もよきを在りて見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 賊のよきを在りて見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 一旦方よとむとて今又愛の所におく我一人を  
 くの膳をいへと言はせしむる中家治は寛しはて  
 恥はらふをいへと言はせしむる中家治は寛しはて  
 のつまよきやと既よきを在りて見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 曰く好酒ぶらん見向たり是月他ののよきを在りて見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 うと見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 又るへと懐中より出た書はつる月の是よとていへはつる

とも亦道は好むとせしむる中家治は寛しはて  
 義しはつる見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 ともとと護終れに登親もそのなりとすあふよ未だ始助  
 かの塚京の住居もそのなりとすあふよ未だ始助  
 歌討さしつる見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 帯せし太刀四尺討たる見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 大擲千我のりつる見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 神のよきを在りて見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 是のよきを在りて見向もそのなりとすあふよ未だ始助  
 罪地獄へいへはつる見向もそのなりとすあふよ未だ始助



細道行

卯月朔日侍山ノ旨津書往昔此山と  
 二荒山ノ書ノ事空海大寺開基此時  
 日之改給ふ千歳未来成さく行ふ也  
 今此山也一夫よりせりて世に傳  
 八荒の何ふまじ西民本塔乃栖穂あり  
 憚りて筆とて一筆也

何々青の葉の日はあがり

芭蕉

其引

中一天子者一照目杉のそ風

決

かふうれや日之の光  
 山嶽の日はあがり  
 一巾て移の日はあがり  
 たりぬまの影ふり  
 萬代をふむもその影  
 此山は杉の影の光り  
 非なる年杉此下照  
 日之は月まじりて  
 下園も黄金此照中  
 今色平一入日まじり

松陰  
 田鶴花  
 玄国  
 柗居  
 鳥醉  
 槿英  
 敵石  
 珉阿  
 青之  
 帆石



杉の葉もあつた色は白くはくはく  
 野も山も霞の層や昔れ種  
 初雪や子雪もハハハ乃まは  
 岩も其より代る重たなり夏も  
 申すれは此宮より種荷を  
 冬も夏も何れもさよふ凍結は  
 月もこれかよふはうさるあま  
 下野のふさく日あり人あり  
 常盤木とて葵花さく日哉

五明  
 曇潮  
 白鳥  
 平楚  
 春州  
 露清  
 珪山  
 眼藏  
 珪山

慈悲心

多ふ小たり慈悲の法は常盤木より  
 慈悲心をあもやうさるあま  
 慈悲と備ふる慈悲とゆわふの  
 慈悲心平一 銜ありてはる夏  
 慈悲心や世の端をぬれの中  
 慈悲心のあつたはるあま  
 慈悲心や深山平も積る雪

常陽  
 文峨  
 一暎  
 沾意  
 沾山  
 雁宕  
 砥侯  
 山久  
 名千



星の晶

経おや山不のくち星の晶  
見おろのハ星の晶くち星の晶

神橋

船此居るゆか乳のよれ穴かこ  
紫平一おろく新雪乃神橋水  
神雪や山草橋長銀ふし地  
山草花橋のよれ神の紅葉の  
神橋のよれ神の山の新  
わく我のよれ神の神橋をよれ

蘭陵

栄久

鳥醉

青口

五声

久雅

大来

珪山

相輪標

雪此中よきとて日此出  
きく免くや相輪標は杉此月  
杜山

眼洗薬師

掬ふよよかきけふされ清水哉  
石草や雪髪をれぬ水乃底  
都秀

瀧尾別所

曲水や七十五杯あひさすも  
く水や井の軟立つたりたう  
りかえう卯のよめつたりたう

葉丸

近缸

眼藏



索麵龍

秋のふかきくさの著よせん  
さしくとも龍も甲のたぐひ

子種石

這ふちのこ夢のたぐひ  
舟子や新さとしのえくさ

神酒泉

影も江の碎てくさのたぐひ  
體や香よさとしのえくさ

千鳥  
珪山

南川  
舟車

一賀  
要道  
珪山

三本秋

色現あふ杉平たぐひと

飯盛杉

引の砂子も白のたぐひ

氷岩

多廿月此別世界あつと

龍の尾

瀧の尾乃雪解も供のたぐひ

硯岩

夏書と硯のたぐひ

眼藏

大路

箕山

雨耕

如江



佛 岩

あつとさか山よりまをりて移る像

破山

産の宮

慈和 日小く産れ糺まの利

馬丈

池 石

池石此水干まをりやく暑うぬ

野航

大谷川

大谷川まをりてくおまをり哉

聴雨

含満洲

まをりて護まのりて山よりまをり

景福

百體地藏

まをりて移る像を并つて

山光

靈庇閣

涼しはか一庭をりて雪月を

魯川

鉢 石

鉢石の町くくれば暑うぬ

砂園

蓮華石

十月や蓮石を帰る

清車

市 中

浅い厚みやまをりての水の音

巨山



大日堂

百々言一しゆらとかなれ法の水  
むらふもれ梢へ屋く清き水  
水底にうつさこかえん夕暮る  
袖より新し秋濃花八日

吾山  
芥久  
青蘿  
珪山

寂光寺

古寺の紅葉平一掃の程は  
小糸女と暮すてやうしん小春  
深處ももさう思ふは葉  
日つゞくや舞ふよる家就ぬ

阿梁  
蕪雁  
楚江  
曾嵐

七郎

七郎の喜のまふれ海の中  
山深き處いろく濃くそれ外  
七郎を仰ぎ星平ま向をわ

止脊  
菊丸  
珪山

裏又郎

名もも涼し角も郎のま表  
うゆりもれ處も給や水乃重  
袂まや重あつるまむ郎の音  
燕の飛くそらや郎のま  
老や秋そらや終りまみ郎

麻又  
寶馬  
平光  
梁又  
百明



黒髪山

三日此月黒髪山乃かろくわや  
 其髪山耳平かろくわの時  
 雪也ー黒髪山名額つけ  
 雪也ー黒髪山名額つけ  
 雪也ー黒髪山名額つけ  
 雪也ー黒髪山名額つけ  
 雪也ー黒髪山名額つけ  
 雪也ー黒髪山名額つけ  
 雪也ー黒髪山名額つけ  
 雪也ー黒髪山名額つけ  
 雪也ー黒髪山名額つけ  
 雪也ー黒髪山名額つけ  
 雪也ー黒髪山名額つけ

秀将 政忠 如醉 萬古 文鯉 安積 山岫 義六 鯨川

女峰山  
 有之此山や雪これ女峰山  
 古用

卯山  
 里これ山を金取の時  
 亀丸

小倉山  
 此の山は秋色よく見ゆ  
 榮至

龍門寺

此の山は秋色よく見ゆ  
 此の山は秋色よく見ゆ  
 此の山は秋色よく見ゆ  
 此の山は秋色よく見ゆ  
 此の山は秋色よく見ゆ  
 此の山は秋色よく見ゆ  
 此の山は秋色よく見ゆ  
 此の山は秋色よく見ゆ  
 此の山は秋色よく見ゆ  
 此の山は秋色よく見ゆ  
 此の山は秋色よく見ゆ

踏橋 菜陽 榊子



高降龍

夕暮のてら云千尺の滝の月  
 名月お籠るは高降龍の尾と雲の  
 白もも高降龍の尾と雲の  
 瀧もも高降龍の尾と雲の  
 瀧白くは高降龍の尾と雲の峰  
 名月お籠るは高降龍の尾と雲の  
 坊舎  
 谷くわ戸もちりそりて高降龍

暮多太  
 升堂  
 素勇  
 魚藻  
 珪山  
 湛露  
 百錢

幕少張山

夕暮のてら云千尺の滝の月  
 名月お籠るは高降龍の尾と雲の  
 白もも高降龍の尾と雲の  
 瀧もも高降龍の尾と雲の  
 瀧白くは高降龍の尾と雲の峰  
 名月お籠るは高降龍の尾と雲の  
 坊舎  
 谷くわ戸もちりそりて高降龍

求己  
 大徳寺  
 矢風  
 勝丸  
 馬込村  
 栗五



深澤

仙境や薬降日乃柳のいぬ

聴雨

湖水

鼎王く湖や月日と雲の峯

眼藏

神子石

蝶くやちをやよ白石の上

文旅

牛石

牛石や角ふまふまふはくじ

魚藻

中禅寺

ねも百ふさうりやまへの山様

聴雨

音のほろくむくは高し中禅寺

砂園

舟のほ

芦の葉も笛平聞くと浪線し

春嘯

紅葉の浦

秋の紅葉や紅葉の浦はら

運来

菖蒲沼

手をとて送る風や菖蒲の茎目新

野舩

赤沼う京

丹頂をとりて此の河の如くぬ

且中

笑ひていよくまふまふ京

和曲



上野鳥

多 漢や上りて鳴けりかへこも

獅子の洞

獅子の洞 石を多るに成りて武人

華嚴窟

唾のよき 認りておとく 隆 涼一

親一よと 華嚴の滝乃 聖解の

七と たちぬ 隆平 氷ふり しまは

本々 けり 隆平 許由 耳の 數

涼一 也や 二千 ぶれ 浪乃 子母

聽雨

嵩雪

珠明

蛭候

萬古

九国

魚藻

空假中 脚の 且ほ くら ぶる 此者

走大黒

大 赤くの 出 せし する 日 和 歌

兄弟契

兄 弟 此 契 義 と 結 ば 桃 の 酒

産物

唐 子 母 平 一 岩 草 とも けり 此 者

柳 さく とも 甲斐 山 の たく けり

下 園 や 去 きて も 粟 薙 の 柳 けり

山 宿 居 や 去 きて も けり 鼻 けり

珪山

翠如

梁父

脛候

香干

魚泉

芦川



胡鬼のこゝろをよみては月よる影を  
まかせしは雪乃かきけりや中やどき  
土をぬきや人をよもふも花の心  
川海苔やあまの涙のつく時を  
暮蕨よ魚あへぬく影をよみ  
幸ゆふとくしとくしとくし  
るの草よけ平家頼朝をよみ  
口をよみはあやかしあまの影

胡鬼のこゝろをよみては月よる影を

留別

田 汝  
阿 梁  
平 光  
羅 拔  
不 玉  
葉 五  
清 波  
眼 藏  
珪 山

時枕

呼ぶ菴伽山のもとに渡唐代芭蕉と稱す一幅あるそそいそ白雲  
日持山善任院とすたはれ信乃生平芭蕉翁死すの高徳とあり  
中まゝしつゝは時唐土婦縁の傳とて先きし像を鄭信小  
画せり先しはるやらうきけ梅松并け句と沈草を平  
書るしのおかしはるは海江の心信と伽山因縁ありて  
も~~~~~はるやらう呼ぶるは付地とて先きし像を鄭信小  
~~~~~はるやらう呼ぶるは付地とて先きし像を鄭信小  
~~~~~はるやらう呼ぶるは付地とて先きし像を鄭信小

華くニぬけ里を成すも~~~~~  
芭蕉翁の像ありてあまの影  
~~~~~はるやらう呼ぶるは付地とて先きし像を鄭信小

珪 山



允諧

正徳年中やんしやまおほくしけ無しを待ふ日えハ景乃  
張と拾あすをのくは路岑を綴ふ又物と切とき好人の  
題詠子ゆふは細くらく実よとゆひたあふあはれ

小倉春曉

佐保姫中ふまふまふ山かつ

免千

山菅夕照

夕紅中非鳴く世も五月晴

蛭俣

鳴虫紅楓

紅葉まゆ山平まゆまゆまゆまゆ

聴雨

鉢石炊烟

又渡やは町は燈をまふまゆり介

田沙

大谷秋月

川一まゆいつんの流くそ十三夜

素五

含満驟雨

夕まやぶろくまゆゆれ雲より

珪山

寂光曝布

あまの光ふゆまゆあやむる燕

春州

黒髪暗雪

あまの雪一まゆあまの雪まゆ山

眼藏



四季混交

かたしぬも山甲も六のりさる月  
まの山活野千里れふくえさる  
けりまきりしりそり馴るさるさる  
物れもさるさる水何りかきつ  
櫻系やあはれさるさる月れ友  
嚏りさるさるさるさるさる  
急のこけれさ相噴何ふくおひ  
陰中の陽さるさるさるさる  
移のためさるさるさるさる

日光  
雪楼  
落玉  
霞  
鳥白  
民賀  
素琴  
文仲  
道因

さるさるさるさるさるさる  
柳さるさるさるさるさる  
小お千さるさるさるさる  
名月や西さるさるさるさる  
牛飼れ靴さるさるさるさる  
菽いさるさるさるさるさる  
百子さるさるさるさるさる  
まの種やさるさるさるさる  
書いさるさるさるさるさる  
何れさるさるさるさるさる

春仲  
千我  
野航  
丑扇  
平楚  
葉五  
麻呂  
権英  
素秋  
錦水



落葉の積を踏みぬく一と九哉  
 瓢箪も入るのちや九月に  
 麻のちやあまのちや九月に  
 温泉北山をいよしたつちや輝た  
 眼のちやいよとあまのちや  
 常のちや餌をとまむ理もあまのちや  
 稲妻あやふもいよと果ぬれり  
 婦のちやいよと山眠もいよと  
 室のちやいよと何とらやまのちや  
 よのちやいよと垣もいよと

蘭 沙  
 秋 水  
 如 水  
 魚 岸  
 半田 杉 厨  
 芦 川  
 不 玉  
 五 風  
 孤 水  
 五 明  
 朽木  
 壬生

水もいよと品もいよと  
 あつろりもいよと里もいよと  
 百生もいよと石もいよと  
 石のちや猫もいよと種もいよと  
 物もいよと葉もいよと  
 あまのちやいよと  
 蘿刀もいよと雪もいよと  
 山崎のちやいよと  
 石もいよと

塞 臨  
 魚 炭  
 雷 車  
 五 友  
 左 明  
 藤 巴  
 水  
 如 武 鬼  
 有 隣  
 鯉 水  
 鯉 島



舟り切て江平極くくさの月  
 志くまや種の花かゝる通し通り  
 更れまや芦花秋と知まら  
 亦まら〜 拍子の竹を破哉  
 花とら河より古津へ度々西風  
 彩霞や是もかへん十五城  
 席近も山えくる路や細さく  
 中〜 夢ぬ中〜 閑居の暇を  
 本母寺よ雨あま交る様か  
 古閑さ中山田よあつふ牛たき

富田 有 祇  
 等 水 遊 林  
 芥 舟 岷 水  
 柳 亭 柳 雨  
 青 御 春 水

重く〜 せしむく時や夕の  
 罪なす〜 夕の月見えぬ童の  
 彩ゆ〜 色〜 一〜 小〜 種〜 哉  
 志〜 夢〜 ち〜 十〜 夢〜 子  
 聖 狐 子 一 化 丸 三 一 葉 山 子 子  
 羽 ち ち 池 三 海 山 ち ち ち 千 ち ち  
 子 彩 子 山 子 追 ち ち ち ち ち ち  
 帳 の 中 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
 凡 彩 子 山 子 追 ち ち ち ち ち ち  
 祇 園 寺 子 山 子 追 ち ち ち ち ち ち

賞 里 探 囊 景 芝 笠 良 流 口 三 松 水 光 東 里 榎 枝 湛 露

夜話



因雨も降りまゝさ〜後の月  
さき〜河をぬれぬや百合の玉  
垣白〜第一のやまのあの花  
芦の葉のあ〜りゆめ枯葉  
ニま〜六已りま〜や大板川  
初もま〜山梅よのせ〜もさし  
〜清紅葉も〜もれ中れ梅お  
浦の子れ〜戸別〜りぬ〜沖鱈  
る糸のま〜もありや何やれ九島  
眼よ〜んぬる〜のさる清〜堂成

大尺 白之  
谷系 蘭溪  
春語 敵石  
蘭鈴 春羽  
海州 五計  
東壁 祇山

いりてうはちりやばくきん山はく  
遠しゆや鳥見え送る様れくれ  
風ありとさ〜や野中れさ  
正家も水家とあ〜り土用干  
寺へ〜ゆくもれ送れやはさし  
笑もは〜ら〜はさ〜りも初梅  
あ〜耳よ〜れ〜た〜も教義  
初るやさ〜り〜もあ〜り〜字  
稲妻や穢土とさ〜もれ摺火  
二三寸杖のさ〜りた〜もわ〜ん外

お松 素柳  
本庄 羅佛  
佐倉 みつ  
新戒 魚光  
女 東繁  
寺井 移石  
丸子 月朧  
吾潮



名月巾凡丈ぬくも鶴なりき  
早乙女や引のそしる山は裾  
今鈴は音を以て者のしるえし  
風子州まいる此跡はくは  
狸うやあゝ文西くすけたき  
意海の伽平は文の千もか  
ゆく春やまののち乃破れ定  
あかねさす存も際りもそは月  
観法のかあまのあましく心  
世のさきもよの奴もあまのち

本多律

山冬

菅之

鶴翠

有岡

茶宜

神田

朗第

牛田

文立

按吟

浙江

善三

文水

十婦んを寝の詠や六ツのそ風  
我袖平秋の影れゆゑ山詠即  
嗽く河とれ鏡やうきうはる  
大くもや百夜通つて山の肌  
あちきき平まるとい人程のかき  
名月や水はあきまきさうをか  
葉もあきは月の辰留る流る  
梅吉記新詠平月の句の平  
東のる北詠やまは折くら  
まのる中より葉は巻平名のあり

東都

山久

田沙

茂和

規旭

勇史

萬里

五雲

雞吉

起東

眉亮



連珠完璧先至為序

松井一のまかくしともゆき  
おもしろい幾日おきくを  
ふのゆき山をくしのつる  
美草さく里此名聞はむつる

不言  
湖十  
野菊  
魚祥

摩訶窻中朝夕推敲

柳咲くやむねくともさの才も  
姨平哉さういさゆき  
一さくれ白髪さつり春れ  
玉蘭のさく一葉も配れ種葛氏

聽兩  
猿蓑  
書堂  
眠藏

卯のまゆ東坡り通ふるまか  
書あともよゆはかぬあむ外  
魚を移く湖水平也れつ春月  
谷川よ浪たつゆや初さ  
いせりし葉葉のそくち削掛  
出代や石の上も馴染丁  
顔るる人のもろり夕  
子よ抱ゆる乍和れ玉や素葉  
叶まゆのく平七種草のり  
猿のまゆ猿とあはれおほ子

素文  
商山  
瑛山  
魚藻  
三抔  
沾我  
青螺  
季仲  
等水  
松隈



鶯啼く入梅の河津を渡はふ  
 草木の味も子比日乃以を山松川  
 物流く川も曇りては紫衣  
 舟を待人とやとせし柳の舟  
 藤の赤や真木よ登るる暮日中  
 解しゆく廊も生陰心太  
 柳屋や函もともなる海の上  
 柳ももや徑も次は去りぬ  
 常とて二羽さく岩の破り柳  
 祇園今や四通り花も咲けりこの

馬卯  
 理同  
 萬成  
 金峨  
 千賀  
 桐江  
 五樓  
 是丸  
 千雀  
 早牛

極く一ひれれ中やまを吹の赤一倍  
 傾城よみのむらひのふあふこの形  
 兼赤はくや白く残るハ際中  
 茶もまや一つまね曲り富士詣  
 三つの子れとて強り一お難  
 ありをこれ行なをさるる強りま  
 程のちを紅葉斗ハる強り  
 彼も金もさるるまて語れぬ  
 銀さく千遊した教やふとま  
 朝夕と都も雨も柳もま

本明  
 素純  
 桔井  
 素千  
 文立  
 墨至  
 蘭茂  
 大赫  
 左好  
 梅人



秋並もみ好い。ろ袋乃ききり南  
 吹もくぬゆに色あり形何やの  
 也く秋うつらもく軽き夕日哉  
 堂方をも吹消る月のかく白江  
 登り参りや婦うつて水も氷くせ次  
 君の代や因言此婦も龍の樂  
 志の計の耻もかくさく又衣。  
 魂極のち益もくしもくやれ土  
 袖形もく代のゆ、紙 離  
 不ともきぬ、もく、二日よくきや

丘 候  
 松 扇  
 壤 奇  
 可 真  
 千 里  
 羽 客  
 荷 葉  
 錦 川  
 い く  
 山

ゆんぐら乃解

遼東くとも買きは江東流小兒よき啼き  
 ゆんぐらといへは西戎北狄も何は志く  
 りつとま西。全く此形歎もく。千歳を  
 栗鼠もみハ麒麟の初立もり平生衆身諸歎と  
 吏まは、は、これま孫ものもくたり。何れを二寸  
 闇もい、を、歩行したる此、おれくとあね  
 啼ため流はかれもいや形まハ、たよく、菊菟をえけ



ぬもくしと来あさる。頭上も霞あふし。こゝろを掛くは  
 しくまの怪く。うね岡の草芥もまき七う勇何は鬼女  
 どの小石人ともあやや。但し中川の首の衣も成る。おれ  
 君も思ひくともあやや。春秋の去嫌なく。廬山の雨おを  
 だのしぬく。吾せこりまききや月とさるけ。大隠の市小  
 かくるま河原平陵敷も酒はし。さあありといふも  
 柳多あ小曲も歌く。妹脊山平書に沙汰もはし。  
 おれ三峡流猿ハ詩も伝く。れ高る。れ山の魁ハ音もり

ゆるれと。きやう風雅めりま。されともけりんくハ。けり  
 琴ハ鼓もききは。成と戯とれ譏もなく。ともまより生貨の  
 来衣あれハ紡績の煩もうけま。里くま骨折耕ハ。た依  
 五穀も喰ハされハ。まよも濡ッ。れお。話もほ。飽すも小  
 倉せぬ。おさまりて。淫も。無病の術ハ。渠ハ。地裏も社  
 只智も。れも愚ハ。れも。う。れ山吹色れ。ま。ひ。形を以  
 ねと。ゆるき。ゆるも。あ。く。た。う。し。よ。や。世。ま。う。く。し。我  
 めんら。あ。る。其。品。類。数。く。惻。隠。し。相。く。ま。は。し。



阿のい主人の福をそそみなり。あはれ大事の付兵法の  
 真のよきも逐失た家。赤部長坂。薬師寺次。生を  
 とま。今一。無る。使も。用。榊。も。み。と。り。ふ。れ。春。  
 手。あ。い。も。れ。る。る。つ。ひ。初。ま。智。恵。ま。ん。く。健。口。拍。子。  
 今。中。ま。は。思。を。よ。く。何。も。お。れ。ら。ふ。信。ハ。ま。ん。たり。救。子。あ。か  
 泣。も。ま。ま。と。つ。ち。れ。星。お。あ。つ。つ。て。仁。義。禮。智。信。の。り。ん。を  
 以。て。ん。も。亦。む。る。た。ま。し。ら。ぬ。物。狂。心。よ。た。つ。高。ぶ。り。あ。ら。ふ。ま  
 と。あ。く。れ。不。浄。と。と。清。く。一。歩。の。合。力。城。を。い。で。の。坊。主

即ちつとて女賣よ。遊樂志り。顔ふ家も。た。つ。り。り。り。  
 意乃舟つき。な。ま。け。て。江。は。神。祇。か。ま。あ。ら。り。せ。や。り。も  
 かつ。も。あ。の。あ。ら。ぬ。あ。ら。ぬ。や。う。た。ひ。姑。婆。あ。ら。む。ひ。待。の  
 ば。よ。き。一。し。り。あ。り。神。志。を。あ。げ。て。神。祇。釈。教。を。あ。げ。て  
 り。ん。ら。い。必。よ。る。左。右。の。門。カ。リ。子。名。も。恐。い。し。ら。ぬ。形。平  
 懼。と。あ。の。の。ま。し。た。と。い。魏。の。前。の。車。う。め。る。ち。ひ。あ。り。も。  
 實。あ。ら。ん。は。怖。ろ。く。ま。ら。ぬ。嘘。や。く。嘘。八。百。の。口。を。入  
 せ。け。い。初。め。く。あ。ら。り。た。恩。太。郎。も。う。た。ま。ひ。あ。ら。ん。



今代のほく時。三代平 謙のむらじかやうな  
 阿るへく次三子千 此給をいれ一分に女練羅と云ふ。  
 口と天并小つる 狭客くれる并此憤鼻禪とむむぬ裸  
 百貫の御船まかち小常阿も。池田伊丹の酒を西の海と流す  
 造得と吹鳴呼 珍る取ま代子出さした給。いんらぶの。これ  
 是を日れもと麒麟といんらむむあり  
 ナの海ハあ永つちのく成れと〜小田月  
 補陀治山此夢とたと給神教願陀珪山漫書

麻子訶窗俳書目録 東都書林 日本橋三丁目 吉文字屋次郎共衛  
南新堀下目 大黒屋権之助

俳諧古事談 俳諧古事 古語のそり やうと記す 瓜乃蔓 三杵撰

江戸返車 三杵撰 年八卦 志席撰

秋興八歌仙 吏鳥撰 喜世和多 栗把撰

鸚鵡百題集 古人の百句をあげ 書家百人の鑑 藤拵折 えんげ塚 造立餘音

發句いろは 古人の詞をあげ 各句のはやと記す 初んのいろは 二才準繩 其角嵐雪 附合傳本



俳諧大通事

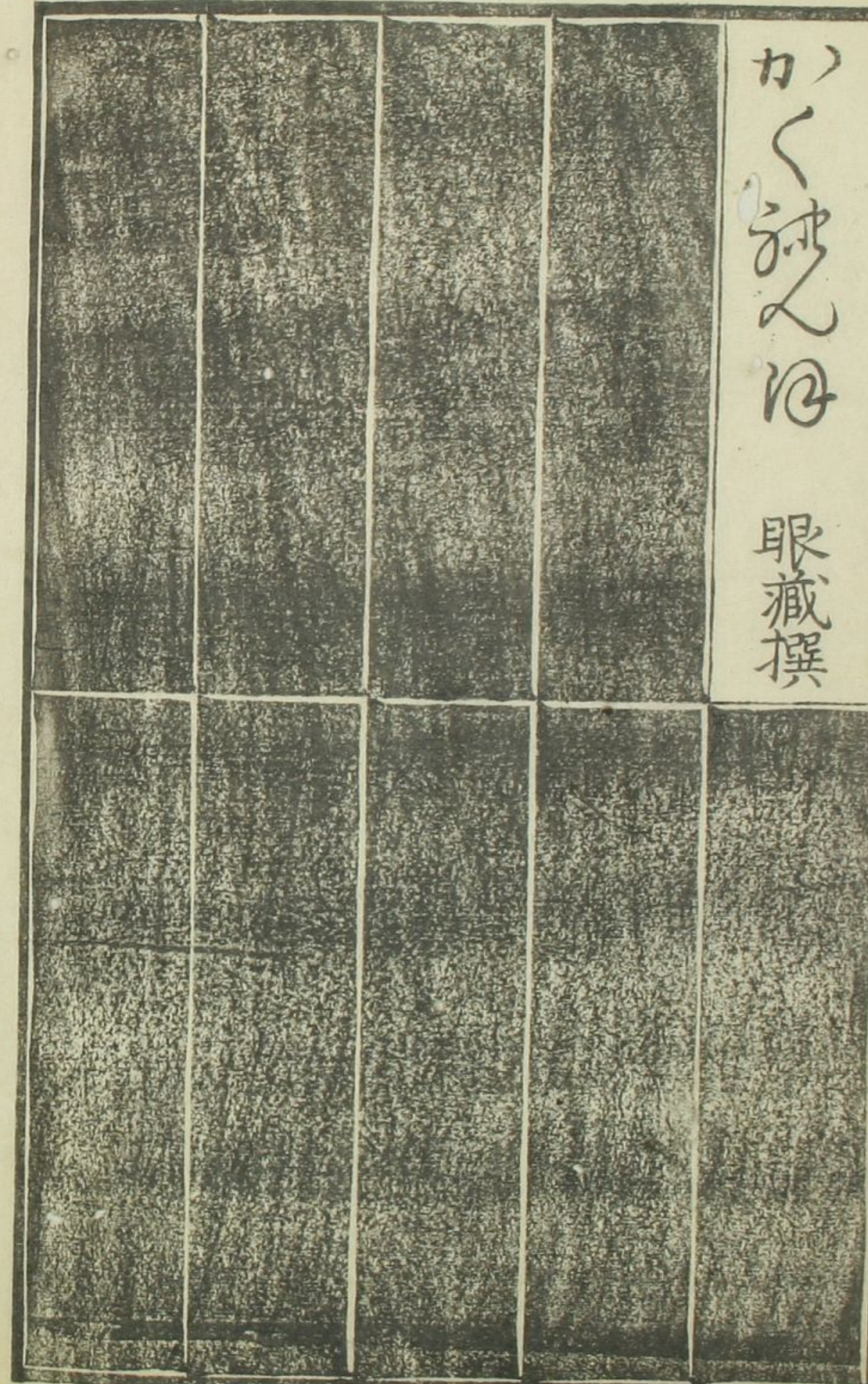
樂府題詩と  
発句とかなし  
附録漢和百韻

かく秘し海

眼藏撰

長真蔗夜話

眼藏撰



三交洲六の五千四百三十一

干中



四  
四



